

# 出雲市における不登校解消のためのeスポーツ活用戦略

看護栄養学部 看護学科  
矢田悠真 奥田大智 狩野愛佳 亀山詩  
乙加彩風 新城佑依 北村美樹

田原(阿川)啓子<sup>1</sup>、佐藤 基<sup>1</sup>、村井 重樹<sup>2</sup>  
1出雲キャンパス、2浜田キャンパス

## ★ 不登校支援を「医療・福祉モデル」ではなく「関係性構築モデル」として実装した地域貢献事業

### 【本モデルの特徴】「段階的関係性設計」+「学生教育組込み」+「研究評価」の3要素統合モデル

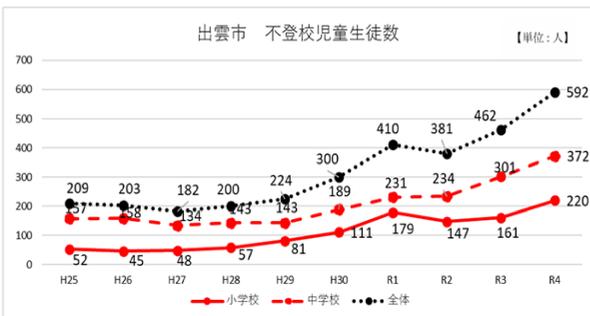
#### ■事業目的(地域貢献)

eスポーツを媒介に、安心できる関係を段階的に構築し、社会性の回復を支える支援モデルの実装

#### ■地域課題

出雲市では不登校児が増加  
⇒無気力・不安・集団適応困難が背景  
従来の支援は「登校させる」支援中心

表1 出雲市の不登校児童生徒の推移



#### 研究評価

#### eスポーツを用いた不登校児支援プログラムの評価

地域・在宅看護学領域

8022010 乙加彩風  
8022025 新城佑依

【研究の目的(評価)】本プログラムの実施前後における参加児の社会性の変化と、支援時に行われた配慮を明らかにする

【方法】社会性に関する9項目の質問紙(5件法)前後比較  
支援に関する自由記載

【対象者】eスポーツプログラムの支援者

\*社会性の項目に関しては、TK式STAR こどもの社会性発達スケール、令和6年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果などを参考に独自に作成した。

#### 支援時の配慮についての考察

「する—される」が明確に区別されない対話的な援助  
→有効に機能する対等な関係に繋がることが分かっている(本山 2022)

【一緒に楽しむ】姿勢から、共に笑い合う「仲間」として関わる  
ことが子どもにとっての“人とのつながり”  
の再構築につながると考える

支援時の配慮について支援者は、「児の心理的安全性を確保し、ベースと興味を尊重しつつ対等な関係を築いていく」「一緒に楽しむ」という姿勢を意識していた

大人自身も楽しむ姿勢を持つことが、相互的な関係性の形成・援助の有効性を高める

児のコミュニケーション能力の向上をもたらすし、社会性の発達に寄与したと考えられる

#### 【結論】

◆ 研究結論  
eスポーツを媒介とした関係性構築は、不登校児の社会性回復を支える有効な支援形態である可能性が示唆された

◆ 事業意義  
本モデルは、教育・地域支援・研究を統合した大学主導の実装型支援モデルとして機能した

#### 実践

#### ■段階的な関係性構築



図1 関係性回復の段階モデル

スケジュール  
第1~4回:リモートによるeスポーツ体験  
第5~9回:大学生と一緒に対面参加  
第10回:対戦 イベント  
科学館、いずもデジタルスタジオ

#### ■本事業の発想

× 登校をゴールにしない  
○ 「人と関わる力」の回復  
手段としてeスポーツを活用

#### ■大学が担う価値

・学生への事前教育実施  
・支援を研究として評価  
・モデルを標準化・発信

#### ■実施体制図



#### ■教育実装

#### ■事前学習 → 実践 → 子どもの変化 → 研究評価 → 教育へ還元

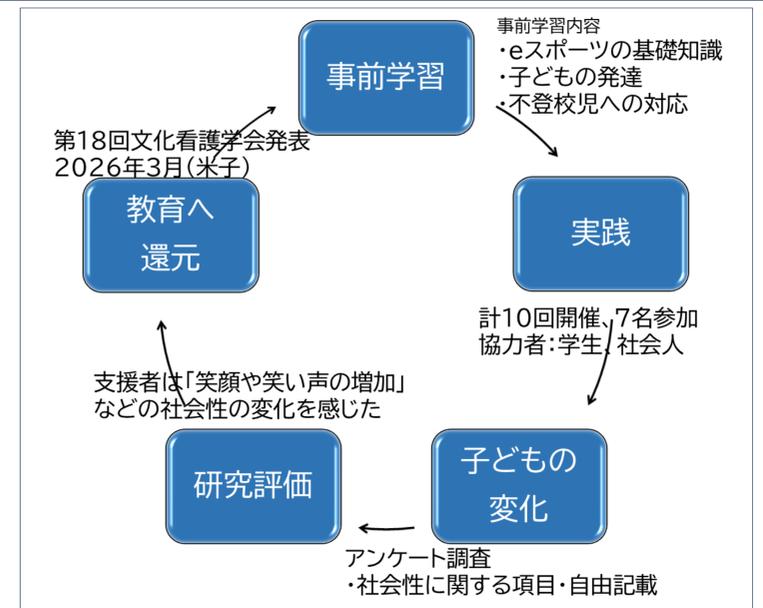


図2 教育実装サイクル

#### 子どもの変化



図5:イベント会場の風景



図4:対面活動の様子



図3:初期の支援(リモート参加)時の様子

#### 結果

参加児童:7名  
研究協力者:  
実施前11名  
実施後10名

#### 社会性の変化

量的分析の結果からは、実施前後で社会性の変化は認めなかった  
・質的分析の結果からは、社会性の変化として、以下4つが挙げられた  
「笑顔や笑い声の増加」  
「会話数の増加」  
「対面での参加」  
「主体性の変化」

#### 支援時の配慮

配慮では、以下の6つが挙げられた  
「詮索しない」  
「自然な関わり」  
「交流しやすい環境づくり」  
「個人を尊重した関わり」  
「コミュニケーションをとりやすい環境づくり」  
「一緒に楽しむ」

#### 社会性の変化について

	非常にあった	少しあった	どちらともいえない	あまりなかった	なかった
自発性や積極性について	8	3	0	0	0
他者とコミュニケーションをとっている様子の有無	見られた	少し見られた	どちらともいえない	あまり見られなかった	見られなかった
参加児童は周囲と協力しているように見えたか	そう思う	少しそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
参加児童生徒は社会集団における規則を守って活動できていたか	できていた	ほとんどできていた	どちらともいえない	あまりできていなかった	できていなかった
実施前後での社会性の変化	社会性の獲得が見られた	少し社会性の獲得が見られた	どちらともいえない	あまり社会性の獲得が見られなかった	社会性の獲得が見られなかった

量的分析では、実施前後で変化は認めなかった